

〔第五章の2〕大谷大学大学院文学研究科

【到達目標】

建学の理念ないし教育目標を十分に理解して本学大学院で学ぶことに強い意欲をもち、一定以上の学力を身につけた学生を受け入れるよう、入学者選抜制度を整備する。

そうした目標を実現するため、以下のような具体的な目標を掲げている。

- ①外国人留学生入学試験および社会人入学試験を含む多様な入学者選抜方法を採用することによって、本学大学院を希望する学生を広く受け入れる。
- ②多様な媒体を使った学生募集の方法を採用する。

(学生募集方法、入学者選抜方法)

A群・大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

【現状の説明】

1 入学者選抜方法

本学大学院では、以下の入学者選抜方法により学生を受け入れている。

- ①秋季試験（修士課程のみ）
- ②春季試験
- ③外国人留学生入学試験
- ④社会人入学試験（修士課程のみ）

以下、修士課程、博士後期課程の順にその概要を述べる。

1.1 修士課程

1.1.1 秋季試験・春季試験

全専攻について、秋季試験（10月中旬）と春季試験（2月下旬）をおこなっている。2回の機会を設けているのは、できるだけ多様な志願者に受験の機会を開くためである。修士課程進学の意志が早くから固まっている志願者、あるいは受験失敗後は他進路を考えている志願者のためには秋季試験が好都合であろう。春季試験は、卒業論文作成作業のなかでさらなる勉学意欲に目覚めた志願者も受験できるように、遅い時期に設けている。各専攻とも秋季試験で入学定員の50%程度を募集し、春季試験で残りの50%程度を募集している。

出願資格は、次のいずれかの事項に該当する者が有する。

- ①「学校教育法」第52条に定める大学を卒業（または当該年度に卒業見込み）の者
- ②外国において学校教育における16年の課程を修了した者
- ③文部科学大臣の指定した者
- ④その他本学大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者

主な出願書類として、秋季試験の場合は、入学後の研究に関して特に関心をもつテーマについての研究計画書（1,500字以内）を提出する。春季試験の場合は、卒業論文（卒業研究、卒業レポートなどを含む）がある学部・学科の卒業者はそのコピー、およびその要約（1,500字以内）、入学後の研究に関して特に関心をもつテーマについての研究計画書（1,500字以内）を提出する。

また、卒業論文がない学部・学科の卒業者は、卒業ないし在籍している学部・学科での研究概要（1,500字以内）を代わりに提出する。

選考は、筆記試験（外国語・専門）と面接を2日間でおこなう。

試験科目	時間	配点	備考
外国語	60分	100点	英語、ドイツ語、フランス語、中国語のうちから1つを試験場で選択する（注1）。
専門	120分	200点	文献読解を含む専攻に関する筆記試験をおこなう（注2）。

表 5.2-1 大学院入試 筆記試験科目（修士課程）

注1) 全専攻共通の問題である。ただし、「中国語」を選択できるのは、真宗学専攻、仏教文化専攻、国際文化専攻に限る。

注2) 専攻ごとに問題は異なる。文献読解の出題範囲は下表のとおりである。

専攻	現代日本語	漢文	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	サンスクリット語	ハリー語	ペハット語
真宗学		○							
仏教学		○	○				○	○	○
哲学			○	○	○				
社会学	○								
仏教文化									
国際文化			○	○	○	○			

表 5.2-2 文献読解問題の出題範囲

注) 仏教学専攻、哲学専攻、国際文化専攻は、○印のうちから1つを選択。また、仏教文化専攻は当該専攻に関する諸文献のうちから1つを選択。

1.1.2 外国人留学生入学試験

外国人留学生の大学院入学を勧奨するために設けている。外国人留学生とは、日本国籍を有しない者で、本学大学院文学研究科を修了する目的をもって入学する者をさす。試験は12月中旬におこなっている。

出願資格は、次のいずれかの事項に該当する者が有する。

①外国において、学校教育における16年の課程を修了した者、または当該年度末までに修了見込みの者

②日本において、外国人留学生として大学を卒業した者、または当該年度末までに卒業見込みの者、その他本学大学院において、大学を卒業したと同等以上の学力があると認められた者
 主な出願書類は、日本語能力を証明する書類、研究計画書（日本語）、推薦書（最終出身大学の学長または指導教員が作成したもの、あるいは志願者の学力に詳しい教員が作成したもの）である。

選考は、日本語試験（60分）、専門試験（60分）、面接によっておこなう。専門試験は原則として日本語で解答することとする。ただし、日本語以外で解答する場合は、出願時に許可を得たうえで、英語、ドイツ語、フランス語のいずれか1ヶ国語で解答することとする。

ただし、次の書類の提出者は日本語試験を免除する。

①独立行政法人日本学生支援機構の日本留学試験の合計点が360点以上の成績通知書

②日本国際教育支援協会および国際交流基金の日本語能力試験の1級日本語能力認定書

1.1.3 大学院外国人留学研究生選考

外国人留学生入試を補足する制度として、外国人志願者のために大学院外国人留学研究生制度を設けている。外国人留学研究生とは、本学大学院の学籍は有さないが、本学大学院の教育・研究の目的に沿い、特定の研究課題のもとに一定期間、研究指導を受ける者をさす。日本語による研究計画書、日本語能力証明書などが出願書類であり、書類選考と面接により可否を決定する。選考は前期と後期の2回おこなわれる。

1.1.4 社会人入学試験

社会人の大学院入学を勧奨するために設けている。試験は10月中旬に実施している。出願資格は、次の条件をいずれも満たしていると本学大学院が認めた者が有する。

- ①大学卒業または同等以上の学力がある者
- ②大学卒業（同等の資格取得）後、4年以上の社会経験を有する者。この場合の社会経験とは、大学卒業後の企業への就業経験の有無を問わず、家業専従者、家庭の主婦など広く社会人一般を対象とする。

選考方法は、各専攻共通の専門に関する筆記試験（90分、100点満点）と面接による判定である。出願書類として、研究計画書（1,500字以内）の提出を求める。

これらの入学者選抜方法により受け入れている各専攻の入学定員は、下表のとおりである。

	真宗学	仏教学	哲学	社会学	仏教文化	国際文化	合計
入学定員	20	20	10	10	20	10	90

表 5.2-3 大学院専攻別入学定員（修士課程）

1.2 博士後期課程

1.2.1 春季試験

春季試験として、全専攻とも2月下旬におこなっている。

出願資格は、次のいずれかの事項に該当する者が有する。

- ①修士の学位を有する者
- ②当該年度に修士の学位を取得見込みの者
- ③その他本学大学院において、修士の学位を得た者と同等以上の学力があると認めた者

主な出願書類は、修士論文（あるいは、これに相当する論文）のコピー、修士論文の要約（1,500字以内）、入学後の研究上、特に関心をもつテーマについての研究計画書（1,500字以内）である。

選考は、筆記試験（外国語・専門）と面接を2日間でおこない、修士論文も勘案する。

筆記試験の試験科目は下表のとおりである。

試験科目	時間	配点	備考
外国語	60分	100点	英語、ドイツ語、フランス語、中国語のうちから1つを試験場で選択する(注1)。
専門	120分	200点	文献読解を含む専攻に関する筆記試験をおこなう(注2)。

表 5.2-4 大学院入試 筆記試験科目 (博士後期課程)

注1) 全専攻共通の問題である。ただし、「中国語」を選択できるのは、真宗学専攻、仏教文化専攻、国際文化専攻に限る。

注2) 専攻ごとに問題は異なる。文献読解の出題範囲は下表のとおりである。

専攻	現代日本語	漢文	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	サンスクリット語	パーリ語	フェット語
真宗学		○							
仏教学		○					○	○	○
哲学			○	○	○				
社会学	○		○						
仏教文化									
国際文化			○	○	○	○	○	○	○

表 5.2-5 文献読解問題の出題範囲

注) 仏教学専攻、哲学専攻、国際文化専攻は、○印のうちから1つを選択。また、仏教文化専攻は当該専攻に関する諸文献のうちから1つを選択。

1.2.2 外国人留学生入学試験

外国人留学生の進学を勧奨するために設けている。試験は12月中旬におこなっている。

出願資格は、次のいずれかの事項に該当する者が有する。

- ①外国において、修士またはそれに相当する学位を取得した者、または当該年度末までに取得見込みの者
- ②日本において、外国人留学生として修士の学位を取得した者、または当該年度末までに取得見込みの者
- ③その他本学大学院において、修士の学位を得た者と同等以上の学力があると認められた者

主な出願書類は、日本語能力を証明する書類、研究計画書(日本語)、推薦書(最終出身大学の学長または指導教員が作成したもの、あるいは志願者の学力に詳しい教員が作成したもの)である。

選考は、日本語試験(60分)、外国語試験(英語、ドイツ語、フランス語のうちから1つを試験場にて選択:60分)、専門試験(80分)、面接によっておこなう。専門試験は原則として日本語で解答することとする。ただし、日本語以外で解答する場合は、出願時に許可を得たうえで、英語、ドイツ語、フランス語のいずれか1ヶ国語で解答することとする。

ただし、本学大学院修士課程または日本の大学院修士課程修了(見込)者は、日本語試験を、本学大学院修士課程修了(見込)者で「外国文化文献研究(英語・ドイツ語・フランス語・中国語のうち1ヶ国語)」4単位修得者は、外国語試験を免除する。

これらの入学者選抜方法により受け入れている各専攻の入学定員は、下表のとおりである。

	真宗学	仏教学	哲学	社会学	仏教文化	国際文化	合計
入学定員	3	3	3	3	3	3	18

表 5.2-6 大学院専攻別入学定員（博士後期課程）

2 学生募集の方法

現行では、大学院修士課程の学生募集は主に教員の学部学生指導のなかでおこなわれている。大谷大学では、文学部の各学科と大学院の各専攻が学問内容においてほぼ対応するかたちをとっており、学部段階で学問探究のおもしろさを知った学生が、対応する大学院修士課程の専攻を志願するケースが多い。あるいは、学部段階での学業成績や知的関心のありようから、指導教員が大学院修士課程の存在を伝え、進学を勧めるケースも少なくない。その他、紙媒体などでの広報、学生募集はおこなっているが、これらは文学部からの志願者層への補足的説明用に活用されているケースが多い。

大学院博士後期課程の学生募集も同様で、学生募集は主に本学大学院修士課程の学生指導のなかでおこなわれている。博士後期課程は在籍期間中に課程博士論文を提出することが求められるが、そうした際に指導教員は、演習での質疑応答、修士論文作成状況などから、当該学生の知的関心の所在、探究意欲や探究姿勢の確かさ、関心学問領域についての知識の質と量などを総合的に判断し、進路について助言をおこなう。指導が可能であると判断すれば、本学大学院博士後期課程への進学を勧めるほか、該学生の研究指導に適切であると判断すれば、他大学の大学院も紹介する。ただし、最終的には学生本人の意志による選択を尊重し、その選択を支援する。

大谷大学文学部以外に向けては、特に積極的な学生募集活動はおこなっていない。しかし後述する紙媒体などでの広報をおこない、志願者にたいして広く公正に門戸を開いている。

2.1 紙媒体などでの広報・学生募集

2.1.1 大学院総合案内誌

大学院の組織沿革、教育目的、カリキュラムの説明、各専攻の紹介、施設設備、奨学金・資格取得についての説明、入学試験概要の説明などを内容とする総合的な「案内誌」や教員個々の研究活動プロフィールなどを掲載した「大学要覧」「大谷大学大学院文学研究科」を作成し配布している。また、過去の入学試験問題を掲載した「入学試験問題集」や入学試験要項を頒布している。このほか、外国人志願者のために、英語版と中国語版の大学院総合案内誌も作成している。

2.1.2 電子媒体での広報

Web サイト（大谷大学ホームページ）のなかに、大学院関係のページを設けており、一部の専攻（哲学専攻）では専用の Web サイト（<http://www2.otani.ac.jp/~tetsugaku1/>）を作成して広報活動をおこなっている。また、真宗総合研究所などの研究活動に関する情報や図書館などの蔵書、文献資料に関する情報を公開し、本学大学院の研究環境が把握できるようにしている。

【点検・評価（長所と課題）】

修士課程の真宗学専攻と仏教学専攻は進学希望者が多い。これにたいして、社会学専攻や国際文化専攻の志願者は入学定員をはるかに下回っている。これは専攻の開設以来続いている状況であり、こ

の5年間でも改善していない。その主な理由は、専攻を修了した後の就職の展望が見えず、資質をもった学生であっても指導教員が積極的に進学を勧めやすい状況にないことがある。修士課程修了後の展望を確保したうえで、積極的な学生募集活動をおこなう必要がある。

後述のように、入学者選抜にあたっては入学定員を充たすことよりも、大学院で研究を継続する水準の学力や知的関心をもっているかないかで入学の可否を判定している。したがって入学者の質の面は、各専攻とも一定の水準を維持している。

上述のように、本学大学院修士課程修了者が本学大学院博士後期課程を志願するケースが多いので、修士課程修了者の少ない専攻は、博士後期課程の入学定員を充たすだけの志願者を確保できないことにつながる。修士課程への進学者が多い真宗学専攻でも、博士後期課程志願者が減少する傾向があり、研究指導をさらに強化したうえで、進学を勧奨する必要が生じている。

【将来の改善・改革に向けた方策】

本学大学院では、これまで大学院の学生募集については組織的な活動をおこなってこなかったが、今後は知的関心をもつ潜在的な受験者層を開拓するような学生募集を工夫する。現在は年に1回のみ実施している進学者向けのガイダンスの回数を増やしたり、また Web サイトなどの媒体も利用し、より積極的に広報活動をおこなう体制を整える。

(学内推薦制度)

B群・成績優秀者等に対する学内推薦制度を採用している大学院研究科における、そうした措置の適切性

【現状の説明】

本学大学院は、数量化された価値によって人間を序列化する社会の風潮とそれへの安易な対応である正答主義（思考や追求の過程よりも、てっとり早く正答を求め、結果のみを重視する学習態度）を助長する入試制度のあり方には原則として反対する立場をとっている。それゆえ、大学院入試においても、筆記試験のみならず、面接において研究に取り組もうとする学生の意欲を見ることを重視している。そのような事情により、本学大学院では、学部生としての成績が優秀であるという理由だけで大学院への進学を認める制度は導入していない。

【点検・評価（長所と課題）】

上記のような本学大学院の態度は、本学の理念に沿うものであり、適切であると考えている。

【将来の改善・改革に向けた方策】

原則として成績優秀者にたいする学内推薦制度を導入する予定はない。ただし、学部教育を活性化させ、学生の学びのインセンティブになるような制度の有無については継続的に検討していく。

(門戸開放)

A群・他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況

【現状の説明】

本学大学院修士課程における他大学出身学生の志願者数と合格者数の年度別の状況は、下表のとおりである。

年度	定員	学外志願者数	学外合格者数
2003年度	45名程度	11 (40)	10 (33)
2004年度	45名程度	8 (30)	6 (23)
2005年度	45名程度	9 (40)	7 (28)
2006年度	45名程度	9 (45)	4 (25)
2007年度	45名程度	8 (38)	6 (23)

表 5.2-7 大学院入試状況（修士課程 秋季試験）

注) () 内は、全志願者および全合格者数。

年度	定員	学外志願者数	学外合格者数
2003年度	45名程度	21 (38)	18 (33)
2004年度	45名程度	17 (41)	10 (23)
2005年度	45名程度	11 (35)	8 (22)
2006年度	45名程度	9 (26)	5 (18)
2007年度	45名程度	8 (36)	4 (23)

表 5.2-8 大学院入試状況（修士課程 春季試験）

注) () 内は、全志願者および全合格者数。

【点検・評価（長所と課題）】

数字上は志願者・合格者ともに全体数の過半数を超える年度もあるように、門戸開放は十分に達成されていると考えることができる。これは、すでに述べたように、本学大学院が真宗学専攻・仏教学専攻という全国的にも希少な学問領域を中心としている点によるところが大きい。第一章の2で述べたように、本学大学院は仏教を世界に解放することを理念としており、研究機関としての本学大学院は真宗学専攻・仏教学専攻を軸として発展してきた。この点は学外的にも認知されていると考えることができる。

しかし文学研究科としては、それぞれの専攻は真宗学・仏教学専攻と相依相待の関係にあり、真宗学・仏教学のみが学外に開かれている現状は、決して十分といえるものではない。慢性的な欠員状況は学問的な質にも影響するので、本学大学院の将来像を明確にすることが課題である。

【将来の改善・改革に向けた方策】

学外からの志願者が増加し大谷大学出身者と競合するようになれば、学生の士気は大いに向上し、学問研究は活発になるであろう。その意味で、慢性的な欠員状態の改善は不可欠である。本学大学院

は、1999年に当時の文部省の大学院拡充政策にしたがって専攻と収容定員を増やしたが、その後の少子化や経済状況なども影響して、当初の計画どおりには運営されていない。現状は、大学改革の陰に隠れて大学院改革が遅れているが、後継研究者の養成などの観点からすれば一刻も猶予できない時期にさしかかっている。そのため、まず、本学大学院における修士課程と博士後期課程の位置づけの明確化をはたしたうえで、修士課程の各専攻における収容定員の見直しの検討をはじめ。

(飛び入学)

B群・「飛び入学」を実施している大学院研究科における、そうした制度の運用の適切性

【現状の説明】

本学大学院は、大谷大学とともに人間教育を重視しており、そうした教育のためには学部の4年間の教育期間が重要であると考えている。したがって本学大学院では、成績が優秀であるというだけの理由で4年間の教育期間を省略して大学院への進学を認める「飛び入学」制度は導入していない。

【点検・評価（長所と課題）】

上記のような本学大学院の態度は、本学の理念に沿うものであり、適切であると考えている。

【将来の改善・改革に向けた方策】

原則として成績優秀者にたいする「飛び入学」を導入する予定はない。ただし、学部教育を活性化させ、学生の学びのインセンティブになるような制度の有無については継続的に検討していく。

(社会人の受け入れ)

B群・社会人学生の受け入れ状況

【現状の説明】

前述のとおり、修士課程に社会人入学試験を設けている。現状では志願者数・合格者数ともに少数ではあるが、社会人はこの入学試験を利用して入学している。また、その多くが本学大学院の中心である真宗学専攻に集中している。

社会人入試の状況は、下表のとおりである。

年度	志願者数	合格者数
2003年度	3	2
2004年度	1	1
2005年度	2	2
2006年度	4	4
2007年度	3	2

表 5.2-9 社会人の受入実績

【点検・評価（長所と課題）】

社会人の志願が宗教的な課題を扱う真宗学に集中している点は、真宗学や仏教学が人間の根源的な悩みや苦しみを学問的な動機とする学問であることに起因していると考えられる。つまり、現実社会でのさまざまな葛藤や人生経験を積んだうえで宗教的要求に目覚めた者が、自己の人生の意味を問うために真宗学や仏教学に志願するのである。その意味では、真宗学や仏教学は社会人にとって意義のある学問領域であるといえるが、それはキャリアアップといった意味合いでもないため、学問的動機をもつ人がただちに大学院を志望するということにもならない。

ただし、こうした制度が社会に広く認知されているかどうかという点については、検討すべき点がある。制度としては現状で特に問題があるとは考えていないが、社会人入学制度をより広く社会に発信する必要はある。

【将来の改善・改革に向けた方策】

学内外のあらゆる機会を利用して、社会のなかに潜在している宗教的な問いが実は大学や大学院で学ぶことのできるような質のものであることを広報する。宗教的動機をもつ社会人が増えることは学内の学問的な雰囲気向上につながるため、その面からも大いに努力しなければならない。そのため、たとえば、広く市民をも対象としておこなっている「紫明講座」や「開放セミナー」などの受講者が、より深い勉学意欲をもてるような仕組みを工夫する（「紫明講座」や「開放セミナー」の詳細については、第十章の「社会への貢献」を参照）。

（科目等履修生・研究生等）

C群・科目等履修生、研究生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

【現状の説明】

向学心をもった受講希望者を、科目等履修生あるいは聴講生として受け入れている（科目等履修生と聴講生については、第四章の「生涯学習への対応」項も参照）。

科目等履修生の出願資格は以下のとおりである。

- ① 本学大学院の学籍を有しない者
- ② 修士課程の受講は、学士の学位を有する者またはそれに相当する者
- ③ 博士後期課程の受講は、修士の学位を有する者またはそれに相当する者

また、教職課程履修希望者は、これに加えて本学大学院を修了していることと、基礎となる1種免許状を既に取得していることが出願の条件となる。

聴講生の出願資格を有するのは、本学大学院の学籍を有しない者で、大学院の聴講生として相当の学力があると認められる者である。

【点検・評価（長所と課題）】

本学大学院の理念、教育目標からすれば、できるだけ多くの人を学修に誘うことが望ましいが、現在、科目等履修生、聴講生の数は他大学大学院と比べて多いとはいえない。

【将来の改善・改革に向けた方策】

今後は社会人のニーズなども考慮に入れながら、さまざまな機会（たとえば、前項で述べたような各種セミナー）、媒体（Web サイトなど）を用いて募集拡大を図る。

（外国人留学生の受け入れ）

C群・外国人留学生の受け入れ状況

- ・留学生の本国地での大学教育、大学院教育の内容・質の認定の上に立った学生受け入れ・単位認定の適切性

【現状の説明】

前述のとおり、外国人留学生入学試験を実施し、留学生を受け入れている。また、外国人留学生入試を補足する制度として、大学院外国人留学研究生制度を設けている。留学生数はここ数年、横ばいもしくは減少傾向にある。本国地での大学教育、大学院教育の内容・質については、最終出身大学の学長または指導教員が作成した推薦書、および専門試験、面接によって確認している。日本語能力についても、試験あるいは日本語能力を証明する書類によって、本学大学院で学ぶのに十分な力をもっていることを確認している。

【点検・評価（長所と課題）】

受け入れ方法としての外国人留学生入学試験には問題はないと考えているが、留学生の存在は本学大学院の研究活性化に寄与するものであり、減少傾向にあることは望ましくないと考えている。以下が課題となる。①外国人留学生へのさまざまな広報活動、②受け入れ後の教育への配慮。

【将来の改善・改革に向けた方策】

①への方策としては、海外の大学との学術交流を深め、大谷大学の存在と認知度を向上させる。また、学術交流協定校からの学生の受け入れについては、大学間の連絡を密にし、学生の研究指導に活かす。さらに近頃完成した「開学の辞」の英訳を広報活動に役立てる。②への方策としては、第三章の「社会人学生、学国人留学生等への教育上の配慮」項で述べた方策を参照されたい。

（定員管理）

A群・収容定員に対する在籍学生数の比率および学生確保のための措置の適切性

【現状の説明】

本学大学院修士課程の入学定員は、真宗学・仏教学・仏教文化の3専攻が各20名、哲学・社会学・国際文化の3専攻が各10名の計90名であり、収容定員は180名である。同じく博士後期課程の入学定員は、全専攻とも3名の計18名であり、収容定員は54名である。

これにたいして2007年5月1日現在の在籍学生数は、修士課程が98名、博士後期課程が48名で

ある。修士課程は収容定員の半数ほどしか在籍しておらず、博士後期課程も若干ではあるが収容定員を割り込んでいる。

課程	専攻	入学定員 (A)	入学者数 (B)	入学定員 超過率 (B/A)	収容定員 (C)	在籍者数 (D)	収容定員 超過率 (D/C)
修士	真宗学	20	25	1.25	40	49	1.23
	仏教学	20	10	0.50	40	21	0.53
	哲学	10	6	0.60	20	11	0.55
	社会学	10	1	0.10	20	3	0.15
	仏教文化	20	4	0.20	40	11	0.28
	国際文化	10	1	0.10	20	3	0.15
修士課程小計		90	47	0.52	180	98	0.54
博士後期	真宗学	3	5	1.67	9	11	1.22
	仏教学	3	3	1.00	9	12	1.33
	哲学	3	0	0.00	9	3	0.33
	社会学	3	0	0.00	9	3	0.33
	仏教文化	3	3	1.00	9	14	1.56
	国際文化	3	1	0.33	9	5	0.56
博士後期課程小計		18	12	0.67	54	48	0.89
大学院合計		108	59	0.55	234	146	0.62

表 5.2-10 専攻別入学定員・収容定員および定員超過率

【点検と評価（長所と課題）】

現状のような状況は、2007 年度以前からほぼ恒常的に続いており、真宗学・仏教学の 2 専攻を除いて、志願者は毎年 1 桁台しかない。本学大学院では、修士課程・博士後期課程とも、履修条件の緩和や選抜方法の手直しなど、さまざまな取り組みと改善を図って収容定員の確保に努力してきた。しかしその甲斐なく、近年は定員を充足するにはいたっていない。原因としては、やはり経済的な問題、大学院修了後の就職難などの不安定要素が考えられる。

在籍学生の定員充足率を高めることが課題である。

【将来の改善・改革に向けた方策】

在籍学生の定員充足率を高めるための方策として、修士課程については、選抜方法や履修条件の大幅な弾力化によって社会人や留学生の入学の促進を図ることなどの方策を講じる。ティーチング・アシスタント制度はすでに発足はしているが、今後さらに拡充するなどの大学院生への経済的支援をおこなう。博士後期課程については、なかなか困難ではあるが、研究者、教育者として国内外の研究機関や大学などへの就職斡旋を、指導教員・大学一体となって取り組む。